展 景

季 刊

No.101

Spring 2021

季刊　展景 101号

目次

令和二年のもろもろ〈短歌〉……河村郁子　4
冬の愉しみ〈俳句〉……新野祐子　6
餅つき〈短歌〉……布宮慈子　8
春は静かに〈短歌〉……市川茂子　10
冬・点描〈短歌〉……大橋千佳子　12
プライベート〈短歌〉……小野澤繁雄　14
〈那須通信 46〉秋の庭から……加藤文子　16
〈薫風颯々 21〉団子さし……神村ふじを　20
〈近江気まぐれ文学抄 46〉
いかいゆう子『近江の小倉百人一首』……新関伸也　24
〈スイスからの便り 1〉
スイスの国柄について思うこと……ギンジック恭子　30
対詠　ごきげんいかが？　PART 77……小野澤／布宮／河村　38
前号作品短評A……42
前号作品短評B……45
無二の会短信……48
編集後記……54

今号のイメージ／菜の花

令和二年のもろもろ

河村郁子

一月　明けまして吉事（よごと）を願ふ令和二年はや忍びくる兆しに翳り

二月　つのりくる不安は新型コロナなりあれよあれよとパンデミックに

三月　亡き姉の一周忌法要密ならず本堂ひろびろ読経の響く

四月　ＣＯＶＩＤ（コビッド）－19の緊急事態発令にわが外出は不要で不急

五月　なんとまあ特別給付十万円すぐに未来の子らへの基金

六月　巣ごもりに体重計をととのへる体脂肪など体内数字化

七月　真ならぬと聞きたる訃報は師の名なり岡井隆の歌魂を抱く

八月　早暁に体調急変覚えすぐＡＬＳＯＫの緊急ボタン押す

九月、十月は義兄の緊急入院、リハビリ病院への転院中の補佐

十一月　姪つ子の薫の還暦祝ひつつわれの老化を実感すなり

十二月　日をつぎて受くる喪中の葉書あり　コロナ禍中はご冥福を祈る

冬の愉しみ

新野（にいの）祐子

画帳よりこぼるる瀬音枯野人
中村哲忌シダーローズのリース耀う
初日さすたまげぼっちの猫の眼に
雪女立ち往生の車列より

核廃絶できぬ訳訊く冬の母
韓流に嵌まる友より寒卵
冬夕焼イブン・バットゥータの旅の果て
鳥たちのすこし近くへ雪卸
合格と考（ちち）の声雪掻き進む
厳冬の年ごと殖ゆる愉楽かな

餅つき

布宮慈子（やすこ）

いま一度餅を搗かむと小正月過ぎたる今日の献立は餅

さなぶり餅、刈り上げ餅あり米どころの餅の名はみな農事にかかはる

時節とて餅を搗きたり山形の食の真中に餅は鎮座す

納豆ときな粉と餡こを用意してホームベーカリーのスイッチ入れる

餅つき機の役目も果たす器具にしてやや草臥しホームベーカリー

生餅はうまいとこのごろ思ふなり子どもの時は当たり前すぎて

丸餅は庄内地方、角餅は内陸なれば雑煮もちがふ

餅搗きてもてなすは義母（はは）の流儀にてふはふは餅を馳走になりき

切り餅は常に小ぶりな柞葉（ははそば）の義母の使ひし菓子箱残る

餅を延ばし切り餅にせむ　雪の野を一羽の青鷺悠々と行く

春は静かに

市川茂子

家内に射し入る初日午前九時ただ沈黙の寒気ただよう

西空の薄ら月はも転(まろ)びゆく正月二日の朝日出できて

減劫(げんこう)のきざしのごとくウイルスにむしばまれゆく思いにからる

外山滋比古先生を偲ぶ三首

颯爽と教室に入る外山先生　開始の時間たがうことなく

ご指導を待ち居るわれら先生は席に着くなり稿を手に取る

親しみて先生囲んで読み合いしエッセイ教室のいまに懐かし

ほつほつと咲きつぐ冬のばらにして夕影の中はつかに揺れる

命絶つ苦渋のあかしに残されし歌の一首に思い重ねる

「〝非正規〟歌人が残したもの」として紹介された歌集、萩原慎一郎『滑走路』に寄せて

デパートの催事場にて懐かしくみちのく料理の今を味わう

蠟梅の匂いかすかな路地の奥　春は静かに近づきくるも

冬・点描

大橋千佳子

ケータイの息子は声を弾ませて満員電車の安全を説く

手作りのマスクに飽きて不織布の無機質にまた委ねたる冬

「キツツキも保険対象」窓口の笑みに勤勉の鳥重なる

農機庫の狩りを反芻するごとくミシミシと猫は子ねずみを喰む

イノシシはまさに居るらしタヌキにもウサギにも似ぬ雪の足跡

「変な奴ばかりが通うこんなとこ母校じゃない」が彼のおはよう

授業中こっそり見せる免許証社会を拒みしは過去も過去

常緑の柘植（つげ）大雪に枝を裂く伐られる春を待つことはせず

夜八時ホールに連帯感満つ月一の有酸素運動

年越しはヤギも茶の間に招き入れコップ酒手の父三十五（父を偲んで）

プライベート

小野澤繁雄

片親となりてすすまぬ菜園の片づき方は娘さん来て
落ちているマスクのこともみなれいて今日は垣根にひっかかりおる
朝のうちみちのやりとりを猫とする若松町を今日は歩いて
メグちゃんを庭にみしことメグちゃんのプライベートをしりし心地か

スーパーの駐車場にも定位置が隣り車のなかの犬まで
ブランチと云ってた分館合流点となるここにしてブランチ凍る
校庭は遊具三色が色にしてあとは体育着帽子のいろか
切手シート二枚が当たり受けとりぬ切手これからシールになると
簡単に聞いてしまいぬこれまでの一生のことも園の年寄り
目がみえぬ足が弱っているなどと今日あう犬は難儀している

〈那須通信 46〉

秋の庭から

加藤文子

体調をめずらしく崩し、十一月に予定していた展覧会を断念した。

夏の展覧会を皮切りに、しばらくコロナで静かに過ごしていた毎日が一変、予期せぬ事態も重なって、ゆっくりしてはいられなくなった。

植物は活動期を迎え、外仕事も忙しい中、次の展覧会を間近にひかえたある日、旧友の訃報が届く。あまりに突然のことでショックがぬぐいきれないうちに、独居生活を送る長兄も亡くなった。

数ヵ月のあいだのできごとに右往左往するばかりであったが、体力も気力も消耗していた。以前はすこしの休養をとれば容易に持ちなおせたのだが、体力の衰えは自覚を超えて加速していたものと思う。

東京で秋の展示を終えた頃から、体調はいよいよあやしくなった。

会期終了を待ってましたとばかりに、一気に崩れたのだ。身動きするのもままならない状態に陥った。体からも心からも、一旦休みなさいと、言われているように思えた。言うことを聞きなさい……と。

寝ていても良くなるような気がしなくて、ゆっくり庭をまわる。はじめは歩くのがやっとで、何もできなかった。三日ほど過ぎた頃から、少しずつ回復を実感できるようになった。活発に動くのは難しかったので、できることからしようと思った。

ひとつひとつ盆栽を抱えて、仕事場の回し台へ運んで手元に据えて対面する。のぞき込んでじっくり見ていると、それぞれの秋を迎えた姿がよーくわかる。

シマ風知草の根元では、風が種を運んだのか、杉の実生が隠れている。この先、野草とどのように共生していくのだろう。

春から夏にかけての大雨で活力の萎えた植物へ秋の肥料をひかえていたが、接しているうちに栄養が必要と思われる盆栽に出合う。サインを受け取ったものへ施肥をはじめてみると、けっこうある。今日があって良かった。気づいてあげられて良かった。

初夏に降りつづいた雨のせいなのか、蕾を抱えたまま立ち枯れているリンドウがここそこにある。今年のリンドウは少し残念なことになってしまったが、わずかに開花に至った目を射るような紫の花は、やはり格別だ。

秋の定番、イトススキや風知草の花穂（かすい）、ホトトギスのうす紫と白の花、実をたわわにつけた西洋カマツカ、モミジなど、雑木の見事な紅葉がつくり出す風景もこの上ない。

温室脇の低い棚の上で、オレンジや赤色のマツバのような細かな葉をなびかせているのは、コレオプシスムーンビーム。名残のレモン色の花が一輪、輝きを増す。

そんな秋の庭で小さな黄蝶が戯れている。なぜか今年は紋白蝶は見かけなかった。その揺蕩（たゆた）う姿を見ていると、何でもない、何でもないヨと言われているような気がしてくる。まるで心配など存在しないかのような様子でチロチロ舞っている。

今年最後の展覧会をあきらめたことで、植物とゆっくり過ごす時間も、心のゆとりもできた。体の中がほぐれてくるのが感じられて心地よい。

モミジ　紅くもえて　撮影：加藤文子

〈薫風颯々21〉

団子さし

神村ふじを

早いものでまもなく1月が終わろうとしている。今年の雪には参った。12月半ばにいきなり大寒波が来て、重く湿った雪をこれでもかというほど置いていった。冬は雪が降るものと毎年覚悟はしているものの、初寒波からの大雪となり、心の準備もできていなかった。

その後、正月にかけても大雪となり、1月の3連休も大雪。1月21日現在で平年の2倍近くの積雪量となり、私の住んでいる左沢（あてらざわ）で70㎝、豪雪地帯として有名な温泉地大蔵村肘折（ひじおり）では251㎝と東北では青森の酸ケ湯（すかゆ）についで2番目となった。

温泉の露天風呂などから雪を眺める分には風情があっていいのだが、片付けることを考えると、風情どころの話ではなくなる。

9人もいた母の兄妹はもう2人しかいなくなってしまったが、今でも神奈川で暮らしている。その叔父叔母は、「雪が降るのが嫌で嫌で暖かいところに出てきたんだよ」と事あるごとに言う。

屋敷田畑が少なく、また兄妹が多くいた時代、郷里を離れて独り立ちしなければ生きていけなかった叔父叔母世代の人たちは、今も多くが都会で暮らしている。

正月は我が国最大の行事であり、歳神を迎える儀式という意味合いが強く、これを大正月と呼ぶのに対して、小正月は後の正月とも呼ばれ、農耕に関する行事が多かった。すなわち、団子さし、雪中田植、成木責（なりきぜ）め、お柴灯（さいとう）などである。ここでは今も細々と続けられている団子さしの行事について記してみたい。

勤務先の教育委員会のそばに旧斎藤半助家住宅がある。青苧（あおそ）商い（展景№98「北前船がもたらしたもの」で詳述）で財をなした大庄屋であったが、時代の趨勢には勝てず山間の十郎畑という集落から挙家離村した。町では昭和53年に斎藤半助家住宅の寄贈

（写真提供：山形県大江町）

を受け、現在地に移築し保存している。

その住宅に、写真のように小正月の行事として団子木を飾っている。

年が明けた正月13日が団子木市である。この日、近在の人たち（在郷衆）が山から伐ってきた団子木（ミズキ）を売りに、町の中心部の店の前を借りて露店（だいどみせ）*を開いていた。子どもたちは団子木などそっちのけで、綿飴やおもちゃの露店に群がっていたのだが……。在郷衆は夕方、その売り上げで小正月に必要な品々を買い求めて帰っていった。

団子木はミズキ。ミズキは「水木」と書き、文字通り力強く水を吸うので、その勢いにあやかりたいことと、冬場に多い火事の火伏せの意味があったように聞く。

団子さしは、ミズキの枝々に団子をさしたものを座敷に飾る行事で、かつては小正月の中心をなす催しであった。団子木の枝元を昆布で包み巾着餅を下げる。枝のところどころに鮒を形どった煎餅や大判小判、千両箱、宝船などの縁起物を吊るした。団子は繭玉を表し、養蚕の繁栄と五穀豊穣を願った。

小学校1、2年生で生活科という学習をしている。これは従来の理科と社会科を合わせたような教科で、小学校低学年という発達段階に応じて、自分たちの身近な生活に焦点を当てながら学習をしている。その中で伝統行事にも目を向けて、今の時期団子木を飾る学校もある。

ある学校では、子どもたちの手作りの鮒煎餅や大判小判に混じって、子どもたちの願いが書き込

んである短冊が飾られていた。短冊の中には、

「みんなといつまでも友だちでいられますように」

「おじいちゃんが百さいすぎてもずっと元気でいますように」

「りっぱな3年生になりたいです」

商売をしている家の子は、

「五こくほうじょう　しょうばいはんじょう　けんこうになりますように」

と、2年生なりに家のことを気にかけて書いている。

ある女の子はこんなふうに認（したた）めためた。

「にっぽんのみんながしあわせになりますように」

大人の話を敏感に聴き取ったのだろう。コロナ、不景気、環境問題の付きまとう暮らしの中で、子どもたちを悩ませている先の見えない不安な世の中、大人社会の責任は大きい。

*だいどみせ――大道店。大道商（あきな）いの店。（『日本国語大辞典』小学館より）

市（おまつ）が開かれた際、町の中心部の大きな道に露店を建てたので、「だいどみせ」と呼ばれていた。調べている途中、ヒキガエルのように少し大きめの蛙のことを「だいどびっき」といったことを思い出し、えっ、この「だいど」って「大道」。書いている途中で混乱してしまった。大道芸という言葉もあるので、もう少し研究が必要である。

〈近江気まぐれ文学抄 46〉

いかいゆう子『近江の小倉百人一首』

新関伸也

天智天皇を祀る朱塗りの門の鮮やかな「近江神宮」は、皇紀二千六百年を記念して、昭和十五年に創建された新しい神社である。大津宮にはじめて漏刻台がおかれた故事により、水時計が復元され、国内外の時計を展示している時計博物館も境内にある。

また、この神宮は百人一首の「競技カルタ」の殿堂でもある。境内の会館で毎年一月、全日本かるた協会が主催する「名人戦・クイーン戦」が開催されている。上の句を読み始めた瞬間に、下の句のカルタを取る早業は、何度かテレビで目にしたことがあるはずだ。

サンライズ出版（2019）

近年では競技かるたの名人・クイーン位をめざす少女を主人公にした、末次由紀の漫画『ちはやふる』で有名となり、その後、女優広瀬すずが主演した映画でも話題となった。この「ちはやふる」で、近江神宮がロケ地となり、また沿線の京阪電車では二〇一二年に「ちはやふる」のラッピング車が走り、ファンを楽しませたことも記憶に新しい。これらに関連したグッズが神社境内で販売され、売れ行きも良さそうである。昨年の夏に妻と二人で訪れた際に土産や「ちはやふる」グッズの傍らで販売されていたのが、この『近江の小倉百人一首』の著書であった。著者は「小倉百人一首」から滋賀にゆかりある歌人や墓、関連の土地、歌碑から二十九首を選定して、自ら訪ねつつ、歌の解説と随想を綴る文学散歩案内書というべき内容である。筆者によれば、約三割の歌が滋賀に関係しているという。その重みと歴史の深さに改めて驚いているところである。

天智天皇を祀る近江神宮にみられるように、萬葉の昔から近江には歌の舞台となったところが多く、国語や古典の教科書に掲載されている名歌も多い。ところが「小倉百人一首」を近江の観点で読んだことはなく、初めて知ることもいろいろあり、興味深く読み終えた。

さて、百人一首といっても実は諸々あるが、世に知られている代表は藤原定家による『小倉百人一首』である。この小倉版は飛鳥時代から鎌倉時代までの代表的な歌人百人を選んでおり、十三世紀に今のかたちができあがったらしい。その第一首が天智天皇の「秋の田のかりほの庵のとまをあらみわがころもでは露にぬれつつ」である。

ゆかりの歌人をざっと挙げてみよう。柿本人麻呂、小野小町、蟬丸、在原業平、菅原道真、紀貫之、和泉式部、紫式部、藤原俊成、西行、藤原定家、後鳥羽院など蒼々たる顔ぶれである。この人名を見ただけでも近江は、古くから、琵琶湖をはじめとした風光明媚な景色や交通の要所であるため人々の往来もあり、多くの歌詠みを刺激したに違いない。

ではこの百首のうち、直接の場所を詠んだ近江歌はいくつあるのだろうか。それが以下の五句である。

一、（十）「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」（蟬丸）

二、（二五）「名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな」（三条右大臣）

三、（五一）「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」（藤原実方朝臣）

四、（六二）「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」（清少納言）

五、（九五）「おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ杣にすみ染の袖」（前大僧正慈円）

これらで一番詠まれた場所としては京都から滋賀の境に位置する「逢坂山」「逢坂の関」の三句で、他は「伊吹山」と「比叡山」が各一句である。

特にこのたび取り上げてみたいのは、三つ目の五一番の藤原実方の次の歌である。もともとは『後拾遺集』に収められている。

かくとだに　えやはいぶきの　さしも草　さしも知らじな　燃ゆる思ひを

歌意は「こんなにも恋い慕っているということを貴方にいうことができません。伊吹山のさしも草が燃えるように、これほど燃えあがる私の思いをしらないでしょうね」となる。歌としては、かなり技巧的で「燃ゆる思ひ」の「ひ」は、「火」に掛けており、また「さしも草」は「いふ（や）」と「いぶき」に掛けている。そして、あとにつづく「さしも知らじな」の音を導く仕掛けとなっている。これらの技巧のため、歌の賛否は分かれている。

いずれにしても「さしも草」は、この歌で重要なキーワードとなっていることは、間違いない。そして「いぶきのさしも草」は、滋賀県と岐阜県にまたがる伊吹山（一三七七メートル）でとれるもぐさ（艾）のことで、別名ヨモギである。綿のように乾燥させたもので、今でもお灸に用いられている。この昔から、お灸があったのだから伊吹山の歴史も相当古い。古代では『養老律令』や『延喜式』に熟艾（もぐさ）の記述が出ており、灸治療は貴族など上流階級に限られたらしく、簡単に庶民は、お灸を据えられなかったのであろう。ただ、江戸時代ともなれば、庶民にお灸がずいぶんと普及している。中山道柏原宿にある老舗「亀屋左京」は、安藤広重の浮世絵に登場するほど有名となり、今も「いぶき艾」の暖簾を掲げている。

さて話は、実方なる人物に戻るが、ずいぶん起伏の多い人生であった。「枕草子」を書いた清少納言と恋仲だったり、宮殿での狼藉、いわゆる藤原行成との諍（いさか）いを一条天皇からとがめられ「歌枕

見て参れとて」と陸奥守として左遷されたりしてしまう。現地で落馬で没したが、清涼殿に雀となって戻ってきたという説話も残っている。

陸奥国の実方の墓は、今の宮城県名取市にあり、西行が竹林の中でそれを発見して悲しみに浸りながら「朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄形見にぞ見る」と歌を詠み、後の芭蕉も『おくのほそ道』で墓参りを試みたが悪天候でやむなく阻まれた、と記している。都の貴族が辺境の陸奥の地で若くして没したとなれば、のちの歌詠みたちの寂寥感をことさら誘ったに違いない。

伊吹山

〈スイスからの便り１〉

スイスの国柄について思うこと

ギンジック恭子

はじめまして。ご縁をいただき「展景」にスイスからお便りをお届けすることになりました。よろしくお願いいたします。

ここスイスに暮らし始めてから、この3月で早38年になります。日本との距離はおよそ1万キロ。当時は、直航便と言えばスイス航空のみで、南回りで一日掛かりの旅でした。日本航空は、アンカレッジ経由でヨーロッパの主要都市まで運行していても、チューリッヒまでの便はありませんでした。日本からスイスに来るためには、一度ヨーロッパのどこかで乗り換えなければならなかったのです。数年後に、ローマ便とパリ便に組み合わせて、日本航空がチューリッヒ空港に立ち寄るようになったと記憶しています。あの頃はもちろんインターネットなどあるはずもなく、一旦海外に出てしまえば、日本語と日本の情報とは切り離された生活になりました。また、今でこそ、一般のスイス人にも日本と日本文化が広く知られてきていますが、当時は、私は遠い極東の国から来

グラールス州 Tödi山の眺め

たバリバリの異邦人だったことでしょう。そんなこんなで、今振り返れば、スイスを本当に第二の故郷と感じるまでには、山あり谷ありだったなあと思います。ちょうど、こちらで暮らし始めてからの年月は、世界的にも冷戦構造が終わり、新しくグローバリズムの問題が始まった時期にも重なります。日本の変化も、外にいるからこそ見えるところもありました。追々にそんな事柄にも触れることになると思いますが、まずは、今回は、私から見たスイスの国柄についてお話ししてみたいと思います。

数年前に、たまたまスイスの建国記念日の式典にお招きいただき、スイスの国柄についてじっくり考えてみる機会がありました。１２９１年８月１日、スイス中部の３州が四つの森の湖（通称ルツェルン湖）のほとりにあるリュトリの丘に集まって、ハプスブルク家の支配から独立するために同盟の誓いを交わしまし

た。これがスイス連邦の始まりで、8月1日はスイス人にとっては大事な建国記念の日です。毎年、その日はスイス各地で式典や大小さまざまなイベントが催され、皆で楽しくお祝いします。私が伺うことになった式典は、大統領臨席のもとリュトリの丘で開かれたもの。毎年のテーマがあるようで、Gastfreundlichkeit（歓待、おもてなし）がその年のテーマでした。式典の主催者が招いた来賓は、大統領とルツェルン地域の観光協会の会長で、それぞれがテーマにふさわしいゲストをスピーチの舞台に伴うということだったようです。ある日、私が副会長をしている瑞日協会にその会長さんから連絡がありました。瑞日協会は、日本に関心を寄せるスイス人が会員の大半を占める文化交流団体です。人々に広く日本とその文化を紹介する目的を持って活動しています。その連絡というのは、「今度の独立記念式典に来賓として出席するのだが、ちょうどこの春に日本を訪問して、日本のおもてなしの心に感銘を受けた。ひいては、日本の方を自分のゲストにお招きしたい、できれば日本人女性に着物を来て列席していただきたい」との依頼でした。そういうことなら、日本のアピールになることでもあるし、と事務局長にも勧められて伺うことになりました。

ところが、その数日前、急にその会長さんからメールがあって、「実は司会者から、スイスが他の国のお手本になれるようなことは何かと質問を受けた、それは外国人として外からの視点を持つあなたに答えてもらったほうがいいと思う、ついては、質問を受けた時にあなたにマイクを渡すから、話してもらいたい」とのことでした。ええー、そんなお話ではなかったはずー、とも思いましたが、もう日が迫っています。腹を括って考えてみることにしました。なにしろ、大統領をはじめ各州の代表や各国の大使も居並ぶ式典ですから、チョコレート、時計、アルプス、ハイジで済ませるわけにもいかず、ある意味、長年暮らしているスイスについて、改めて向き合ってみるいい機会をいただいたのかもしれません。考えた上で、四つの柱を立ててみました。その時の要点をもとに、もう一度振り返ってみたいと思います。

一つは、スイスの民主主義精神。スイスは連邦制で、26のKanton（州）から成り、それぞれの州には州政府と議会があります。公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の四つで、ドイツ語圏が60パーセントを占めますが、たくさんのスイスドイツ語方言があって、小さい国ながらも、その多様性と自立精神には独特なものがあります。連邦政府は、外交や防衛、それと内政の大枠を担います。主要政党から選出された7人の大臣で構成され、その中から1年ずつ持ち回りで大統領が選ばれます。言ってみれば、政府内には与党も野党もありません。充分協議して決定する、これはスイスが他国に誇っていい姿勢だと思います。また、直接民主制なので、国民投票が頻繁にありますが、政府からの詳細な冊子配布はもちろんのこと、その前には必ずテレビでも新聞でも、その案件を取り上げて詳しい説明がされます。大臣たちも識者との討論番組に出演して、オープンに議論しますし、司会者もかなり突っ込みを入れます。また、国民の誰でも10万筆集めれば、その案件を国民投票に図る機会があるので、政治参加への実感が持てるものだと思いま

す。概してスイス人には、政治は自分たちの生活と直結しているという意識が浸透しているようです。大事な国民投票の前には、家庭でも個人の集まりでも、この件についてどう思う?といった話がよく出ます。たとえば、この3月初めに重要な案件についての国民投票があるのですが、今日もウオーキングの友人と話したばかり。そして、これは何よりもお手本にしたいところですが、最終的には多数決で決まっても、少数意見も無視しないという姿勢があることです。よく、それはスイスが小さい国だからできること、と言われたりもしますが、基本的な民主主義の精神がスイスに深く根付いているということに、日本から来た私は強い印象を受けました。いずれにしても、民主主義には自立した個人の自覚と責任の意識が大事なのだなあということを学ばされます。今回のスイスのコロナ対策でも、民主主義の精神をギリギリまで生かそうとしているように感じられますが、これからどうなるか注目です。

次に、ボランティア精神。スイスには Verein がたくさんあります。これは、協会とか団体とかクラブとか訳すのが適当でしょうか。私の関わっている文化団体もその一つですが、文化からスポーツと多岐にわたり、その大きさも様々です。共通の関心や目的を持った人たちが集まって会を作り活動しています。運営を担っている役員は、手弁当で一切の報酬はありません。私の住む町にもそういった会がたくさんあって、町で何か行事がある時には総出で手伝いますが、ボランティアの社会貢献です。ある意味、この Verein がスイスの社会生活を支える一つとなっていると言えるかもしれません。

三つ目は、寄付の精神。スイス人は質実剛健だと言われます。よく言えば、無駄遣いはしない、悪く言えばちょっとお金に細かい（⁉）けれども、自分が助けたい団体に定期的に寄付する人が少なからずいます。また、いざという時には、快く寄付をする人が多いように思います。特に、どこかで災害が起こった時には、テレビなどで寄付の振込先が紹介されて、いつもかなりの額が集まるようです。個人的な体験での実感もあります。２０１１年の日本の東北大震災の時のこと。私たちの協会もいち早く、東北に義援金を送るためにチャリティーコンサートを開催しました。その時に一晩で集まった額の大きさには、本当にものすごく驚いたものです。

最後に、町や村や自然の景観を守る努力。たとえば、チューリッヒには、リマット川を挟んで旧市街が広がっていますが、中世の街並みが当時のまま残っています。外側はそのままに、内部はもちろん改装されて現在も暮らしが息づいているチューリッヒの旧市街。そんな石畳の路地を散歩するのが好きです。スイスで一番大きい街チューリッヒだけではなくて、スイスの其処此処で美観を守るための厳しい建築の基準が設けられています。美しい自分たちの国を守り伝えていこうという姿勢を感じました。

あの時の司会の方は、「いろいろ褒めていただき恐縮ですが、今日は建国記念の日なので、素直に喜んで受け取りたいと思います」というようなことを言われました。私も長い間この国で暮らし

ていますから、もちろん陰の部分も経験してきました。どんな国にも光と陰の部分があります。故郷の日本もそうです。けれども、生まれ育った日本、縁あって第二の故郷となったスイス、この両方の人々の文化と社会を大事に思っています。

対詠　ごきげんいかが？　PART 77　〈2020－2021〉

ＯＮＫ
小野澤繁雄
布宮　慈子
河村　郁子

きのふより舞台が転換したやうに世界はいきなり白に変はつた　12月15日　Ｎ

白銀の世界に心躍りしは二十代　今、転倒禁忌　12月19日　Ｋ

この角でポンプの音をきいていしその養魚場一つ昔か　12月22日　Ｏ

釣堀の武蔵境にありしこと今思ひ出づ釣りしことなし　12月27日　Ｎ

２０２１年

池の辺（へ）に釣り竿の先見つめゐし翁の横顔今は幻相　1月8日　Ｋ

一日分の会話というをしておりぬ池をきれいにしている人と　1月12日　Ｏ

雪被る蔵王を眺むる夕べかな大寒の一日（ひとひ）はや過ぎむとす　1月20日　Ｎ

あさつては雪降るらしと伝ふるに庭木ゆるがず乾燥に耐ゆ　1月22日　Ｋ

晴れ間でも雨のち晴れはキラキラし洗われ出でてなお冬のそら　1月25日　Ｏ

サラサラとまたモサモサと降つてくる雪に見てゐる無常といふこと　1月31日　Ｎ

中空に寝待ちの月のくわうくわうと睦月尽にて無事を礼せり　2月1日　Ｋ

スーパーを出てみる空は夕焼けて日々みるそらをこのそらとする　2月4日　Ｏ

雪の日も晴れ間みつけてスコップを持ち出してゆく日課のやうに　2月10日　Ｎ

東隣の窓よりの反射光　仏間いつぱい夕陽が染める　2月17日　Ｋ

白梅を先にみた日と後にみた日と花をみて紅白を云う　2月18日　Ｏ

瀧山（りゅうざん）は蔵王のいちばん近い山夕陽当たれば白く輝く　2月25日　Ｎ

親族（うから）らと三回忌法要の境内を紅梅白梅愛でつつ歩む　2月28日　Ｋ

一歩（ひと）きして町内の梅そのほかにみた花あれど梅がのこれる　3月3日　O

刻まれてゆく三一一それぞれの記憶を越えて春霞立つ　3月11日　N

紅梅のさいごの一花散りしあと白沈丁花のい群れ咲きゐる　3月14日　K

アパートの庭にもみえて白蓮の重々とみゆ幼木なれば　3月17日　O

城跡の園の紅梅咲き始むここ山形は春の彼岸に　3月22日　N

さ庭にも紅梅のあと沈丁花、海棠咲きつぎ励ましくるる　3月31日　K

前号作品短評A〈小野澤〉

●朔の夜が十五夜にして満月は二日となれば供物を変へる　河村郁子

「十月の月」とする一連の冒頭のうた。令和二年、陰暦では四月と五月の間に閏四月があったので、十五夜（陰暦八月十五日）が例年よりひと月遅れたという。その十五夜が十月一日。満月は十月二日だったので、この歌のようになった。機知でもあるが、供物を変えたというところ、面白い。

そういうこともあってか、雲間の月、下弦の月、上弦の月などが前半（のうた）に配置され、後半はさらに火星、木星までもが配されて、みるものとして能舞台、また（慈照寺は）向月台にも及ぶ。さいご月面探査に触れ、抒情質を問う。全天、とりわけて秋の月。調子のよさからは、この歌、

今月はをりしも火星大接近　東に火星　西に木星

慈照寺の向月台やいかならむ　狭庭に出でて月光掬ふ

慈照寺は銀閣寺の正式名称。向月台はその庭園にあり、月に照らされたようにみえるという。仕草にも優美なところがある。

●赤まんまうねりつつ延ぶ獣道　新野祐子

赤まんま（犬蓼）で、秋の季語。赤まんま、でも素朴、普通、見慣れたもの、というような説明を読んだ。雑草だが、丈低い、記憶の中でも赤い小さな花が鮮やか。花や果実を赤飯に見立てて、別名が赤（の）ま（ん）ま。懐かしいものでもある。

けものみち自体がうねっているのだろう。起承がわからないようなところ。みちをなぞるように、赤まんまが延びている、という。雑草の丈夫さもある。これはけものみちとのとりあわせだが。みたままで、強度のある表現になっている。好きな句。

落鮎の阿修羅のごとき水知れり

落鮎は、産卵後、川を下りつつ死んでゆく鮎のこと。下り鮎とも。また背に鉄錆のような淡い斑紋を生じるところから、錆鮎ともいう。興福寺の阿修羅像では、肉身部と裙で、もとは鮮やかな朱色だったという。ここでは水が錆色に染まってみえたということか。句には、ある種切なさがある。

●キクイモの歌うたひたる叔母なりき徳丸ヶ原に分け入るみつこ　布宮慈子

叔母は布宮みつこ。（生前唯一の）歌集に『紅』があり、手持ちのものをみると、集中一連に「キ

クイモの花」があった。こんな歌、初句は（高女）学徒動員の歌を残してもいるこの世代のものか。

・戦（いくさ）なき野に咲き誇るキクイモのことしの花もしみじみ黄色

・わが宿の庭隅に咲くキクイモのさいごの花は折り取らずけり

集中のⅢ（徳丸ケ原）に収められた一連で、Ⅲはそれまでの豊島区から板橋区（徳丸）に転居して以降の歌を収録する。徳丸ケ原は古地図に読んだ地名らしい。そこでのキクイモ。ここではキクイモを通して交錯するものがある。現在と過去でもある。

キクイモの花を知らずに過ごしたる武蔵野台地をいまは思ふも

以前は、たしか武蔵野市にすんでいた。そこから、いまは思ふも。武蔵野台地と云っているところにも注目した。この歌にも。聞きてをりたり、声は直前の歌から「みつこの声」。

いつも吾（あ）に時間はなくて曖昧に聞きてをりたりああ上滑り

前号作品短評B〈慈子〉

●マルちゃんにあうはひさびさ近所ではハルちゃんが話題にもなる　小野澤繁雄

マルちゃんとハルちゃんは動物であろう。これまでの作者の歌を読んだことがある人には、散歩の折に会う犬の名前だと見当がつく。犬についての話ができるほど、地元の人と触れ合い馴染んでいる作者像が浮かぶ。次も関連の歌。

犬の名をしるのみにして名を呼べばまさかにも飼主のよろこぶ

犬の名前は知っているが飼い主の名前は知らない。たまたま出くわした犬に呼びかけてみたら、飼い主が反応して喜んでいる。人間同士では難しくなる会話も、動物を介してのコミュニケーションは不思議とうまくいくものだ。そんな日常のひとこま。

渡り切ってはちまんはしと名をしりぬみちの一部が名をもつひとつ

うお座には魚が二匹はしらざりき複雑な歩道橋絵のみちびきに

ふだん何気なく歩いている道に注目した二首。こんなことあるね、と思わせる歌である。知って

いるようで知らないと気づく瞬間。無駄な力が入らない、作者独特の歌いぶりである。

●戦いの海に散りたる父遥か海の色せる竜胆（りんどう）供う　　市川茂子

戦いの海というのは、第二次世界大戦時の南方の海を指すのではないだろうか。父親は、戦争ではるか遠い海の彼方に散ってしまった。遺骨はなく、父親のかすかな思い出も作者の心の中にあるだけだ。ちょうどリンドウが咲くころになると、父親を思い出す。リンドウの花は海の色だ。そのリンドウを生けることで作者の心は平穏になっていくのである。

コロナにて変る暮らしの様相に何もせぬまま過ぎる明け暮れ

路地の角カーブミラーは付けられて老いの姿を写して行き来す

コロナ禍をどう過ごせばいいかは誰にとっても大問題。そこを正直にうたっている。カーブミラーの歌は、どこかコミカルなものを感じさせる。道の角にカーブミラーが付けられた。奇妙に映るうえに、老いの姿をさらけ出す以外、ないではないか。まったくもって噴飯物だ。歌の裏側からは、そんな声が聞こえてきそうだ。やや意識しながら角を曲がる作者が見えてくる。

無二の会短信

◆年越しのまぎわにテレビの画像が消えた。電器屋さんに見てもらうと、修理しても新しく買うのとさほど変らないというので、新しいテレビに替えてもらった。年明けの月末に、今度はクーラーに異変が出た。二年前転居した部屋に付いていて、保証書を渡されたが読んでいない。ランプが点滅して、中でパチパチと音がする。事故になったら困ると思い、使用を中止した。まもなく節分になり春は近づいているのに、天気予報は冬の嵐になると言う。いま少しの辛抱だと思っても、風邪などひいたらと思案しながら、迷っているうちに時が過ぎていく。　市川茂子

◆はじめまして、縁あって短歌を載せていただくことになりました。仕事柄（教員）、添削や校正に甘んじてきた身にとって、作歌をとおし自分と向き合うのは半世紀ぶりです。展景ならぬ点描、テーマは絞れるべくもなく、「まだ何も書かれていない予定表なんでも書けるこれから書ける」（俵万智）のごとく。ご容赦ください。　大橋千佳子

◆北欧は、スウェーデンの（とりあえずミステリ）作家、ヘニング・マンケルの（スウェーデン南イースタ署の）刑事ヴァランダー・シリーズを読んでいます。ラーソンのミレニアム3部作を読んだあとで、おすすめというマンケル。生年が同じ一九四八年で、いろいろ同時代性を感じるようなところがあり、読みやすい。ヴァランダーには、娘が一人リンダがいて、いろいろな志望のあと、イースタ署に警官として赴任直前、一人暮らしの（多忙で私生活がないという）ヴァランダーに同居する。三十歳になろうという娘は、その同居に息苦しさを感じている。そこに事件が起きる、というのが、シリーズ第9作だが。一人暮らししていたこちらにも（下の）息子が同居して一年余り、じぶんには余り話すことがない息子との、そのいくらかは緊張関係がおもいあわされて、小説中の父娘のやりとりも切実なのだった。　小野澤繁雄

◆昨年ほとんど雪が降らなかった分、今年はすごい雪である。まさに降り溜めでもしたように雪の毎日が続いている。まもなく立春を迎えるが春はまだ先。少しでも春を感じたいと思う北国山形である。コロナも身近なところで感染者が出ている事態になってきた。春の気配とともにコロナが収まってくれればいいのだが…。「文机の紙縒ひと束日脚伸ぶ」　神村ふじを

◆令和元年は七ヵ月であったが、令和二年から丸々一年である。きっと良い年になると、希望に満ちたスタートであった。一年を終わってみると、コロナ禍ばかりでなく、異常気象の災害など想定

外の出来事の一年であった。まだ、大雪の予報、緊急事態中と今年に引き継がれている。いずれ、ポストコロナの世に順応できる心の準備をしていきたいと思う。良い世になってくれることを祈っている。

河村郁子

◆結婚してスイスで暮らし始めて38年、この間、世界も日本も色々な意味で劇的な変化を遂げました。元々は外の人間だったからこそ見えるスイス、逆に、外にいるからこそ見える日本もあるかもしれません。「スイスからの便り」、折につけ見聞きし、感じたことなどをお伝えできたらと思います。コロナ禍で人々の気持ちも沈みがちな毎日です。街路や野辺にある木々が花をつけるスイスの美しい春を心待ちにしています。

ギンジック恭子

◆百人一首を書きながら書棚にある古い本を見直した。三木幸信『解釈と鑑賞小倉百人一首』（京都書房）である。初版一九六二年、新訂版三八刷一九七四年発行で、出身高校から生徒全員に渡されたものだ。高校では、かるた大会が毎年あり、学級代表にもなったことがある。大切にしたわけでもないが、五十年近く傍らに残った最古参の本だ。調べると今も改訂を重ねている、ご長寿参考書である。

新関伸也

◆今年も葉山元旦登山ができて幸運だった。年末年始は大荒れという予報は、ここ置賜地方（山形県）には当てはまらず、風もなく静かに雪が降る穏やかといえる一日となった。今年で三十一年目。仲間がいるからできることだ。今回のメンバーは、中学一年生から六十七歳までの五人。七十歳まであと四年登るのが私の目標。山頂の葉山権現に「コロナが早く収まりますように」と手を合わせてきた。しかし、このところコロナ禍は拡大深化するばかり。異常気象が追い打ちをかける。これだけ世の中の情況が悪くなると、日々のささやかな出来事や出会いに楽しみを見いだす努力（?）をしようかと思ってみる。今までは自虐的に苦しいことを探していた私だけれど。今回の句はそんな思いで詠んだ。誰かが俳句は肯定の文学だと言っていたなあ。

新野祐子

◆昨年夏の脊椎骨折の治療後、胴体に巻きつけていたプラスチックのコルセットを、最近になって、「はずしてよい」との許可が出た。ところがはずしてみると、ひどく歩きにくい。コルセットのせいで胴体の筋肉が落ちてしまったからだそうで、筋肉を取り戻すためには、毎日、日に三、四キロは歩くとよい、と言われているが、これを実行するのはなかなか難儀である。

松井淑子

◆介護の仕事をし始めて春で七年目に入る。文章を書かなくなり、介護の仕事に専念するようになった後、なんだか、自分の価値が一段低くなった気分になった。同級生に会ったとき、「そう。

コピーライターを辞めたの。残念だね」と言われ、そうか、残念なんだ、と思った。そうした折に触れ、文章のことを考えると、自分にはやり残しがあるようなモヤモヤした気持ちが生まれていたが、最近、それはそれでいいや、と言い聞かせている。この六年間の自分の頑張りは、私がいちばん知っている。私は、私を信頼している。だから、やり残したことがあっても、もう、気にしなくていいよ、と自分を許そうと思う。

山内裕子

新会員紹介

大橋千佳子（おおはし　ちかこ）……一九五七年、山形県白鷹町生まれ。元中学校教員。現在、私立専門学校講師。

ギンジック 恭子（きょうこ）……一九五四年福島県に生まれ、五歳から東京で暮らす。大学卒業後、企業会員団体の事務局に勤務。一九八三年からスイス在住。異言語・異文化間理解交流、日本の文化紹介の仕事と活動に携わる。家族は、スイス人の夫と息子一人。趣味は、絵を描くこと、歌うこと、朗読。

編集後記

◆季刊「展景」は一〇一号の今回から、発刊の月をひと月ずつ後にずらすことにした。年末年始や年度末を避け、印刷所の繁忙期にも重ならないようにするためである。これからは四月・七月・十月・一月の刊行となる。よろしくお願いします。

◆新たに会員へのお誘いをしたところ、数人が応え、原稿を書いてくれた。うれしい限りである。短歌の大橋千佳子さん、エッセイのギンジック恭子さん。次回から短歌作品を出してくれるという返事を梅津純子さんから受け取っている。

もともとエッセイを連載していた新関伸也さんが復帰してくれた。超多忙となったときに休載して以来、久々の登場である。新関さんは天童の人だが、仕事の関係で長いこと滋賀県に住んでいる。「近江気まぐれ文学抄」は、近江に関する本を通して見えてくるものを捉える試み。関西のほうの知識や情報に触れる機会の少ない当方にとっても興味深いエッセイである。

大橋千佳子さんは久方ぶりに短歌をつくったという。表現の方法はいろいろあるが、ふたたび出合ったのだから、短歌という器に挑戦していってほしい。ギンジック恭子さんは古くからの友人。最近は年賀状だけの付き合いとなっていた。インターネットでやり取りできる、いまの時代だからこそ縁がつながったと思っている。遠い国であるスイスについて、日本人がイメージするものは乏しい。住んでみなければわからないことが多々あるだろう。生活に密着した「スイスからの便り」を楽しみにしている。

◆新型コロナウイルスの騒ぎが始まって一年になる。正直、もう飽きている。政府の対応の仕方にである。何をどうしたいのかわからない。当方の生活はコロナ禍の中でも変わらない。ほとんど外食もしていなかったから、気をつけながら買い物をし、いままで通り家でしっかり食べるだけだ。そんな折、「延暦寺の僧が十二年の修行満行」という記事を目にした。比叡山延暦寺で天台宗の開祖最澄に仕え、読経などを行うのが「十二年籠山行」。境内の浄土院にこもり、毎日朝の四時から読経するなどの修行を十二年のあいだ休まず行う。情報を得る手段はなく、世間から隔絶されているという。この修行を終えたのは渡部光臣住職（四十八歳）。山形大学理学部を卒業し、神戸の会社に勤務した後、比叡山に入山した人だった。修行を振り返り、「体力的にも精神的にも苦しかった」「引き続き最澄に仕え、世界を騒がしている疫病の退散を祈念したい」と話したそうだ。この僧の心持ちに少しでも近づけるように、仏教の入門書を読んでみようと思っている。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 101号
二〇二一 年四月五日 発行
編集・発行人 布宮慈子
制作 スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2021 MUNINOKAI. All rights reserved.